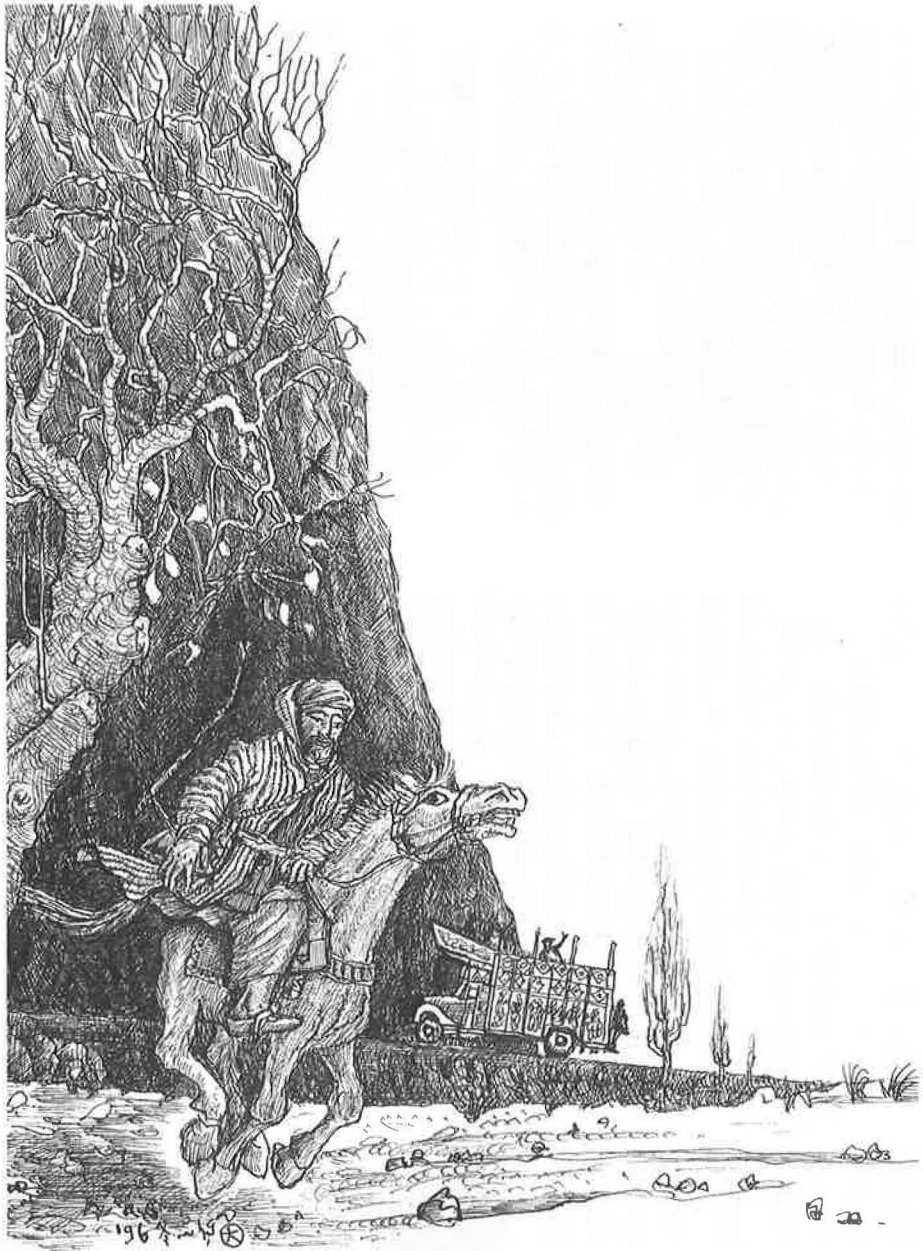


1996年12月18日

ペシャワール会報

No.50

ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二



- 貧しさの中の豊かさ 中村 哲
- 治療がおもしろくなってきた 蔵所麻里子
- 川を越え山を渡ってフィールドワーク(二) 藤田千代子
- 癒しを求めて 立花一志

ウズベキ・ホスロー *表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。
現地の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシャワール会 インターネット

ホームページ <http://www1.meshnet.or.jp/~peshawar/>
電子メール peshawar@mx.meshnet.or.jp

貧しさの中の豊かさ 華やかな日本の師走に思う

PLMS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 院長
JAMS (日本・アフガン医療サービス) 顧問医師 中村 哲

師走の日本の街は華やかである。色とりどりのクリスマス飾り付けが目を見せ、商品の山が人々を楽しませ、多幸感と消費欲をかき立てる。悪いことではない。汗水たらして働いてきた人々の、つかの間の幸せである。私もクリスマスと新年くらいは日頃の恨みを去り、子供たちの笑顔を求めて家路につく。

しかし一方で、どうしてもこの光景になじめぬわだかまりが、心の底に沈澱している。

敵意と不安の中で

一九八四年、私は家族と共にペシャワールのらい（ハンセン病）病棟に赴任した。当時、アフガニスタンの内戦が最も激烈な時期で、現地は暗い敵意と不安に包まれていた。

それでもペシャワールは天国と言えた。モデル・キャンプを訪れる外国人には実感できなかったが、三〇〇万人に迫る難民たちが外国人の行けぬ国境地帯にあふれ、アフガニスタン国内でも鬼気迫る光景が展開していたのである。当時は、これらの情景を日本に伝えることが困難であった。大方のNGOは大都市に本拠を置き、ジャーナリ

ストは戦争の動向にばかり集中していた。点と線以上の実情は、現地滞在者でさえ肌身で理解していたかどうか疑わしい。

屍の山

一九八六年になって「ペシャワール会」を中心とする日本の支持者たちの助けでJAMS（日本・アフガン医療サービス）が発足する前後の難民の実情は、描くのに躊躇する。遠隔地の国境地帯は特に厳しかった。爆撃で追われた人々の群れが長い逃避行の後、大量に死亡することは普通に見られた。わずかの医薬品を下げて「救急援助」にかけつけた時、数百家族が既に凍死していたことも一切ではない。荒涼たる岩石沙漠の中に無造作に折り重なる屍の山。嘔吐を催しながら、まだ生命のある者を選び出して処置したが、救命できた例はなかった。医療とよべる代物ではなかった。無数の墓碑は忘れることができない。

難民キャンプでもまた、死が隣り合っていた。二七〇カ所に分散された三〇〇万人の難民たちに、十分な食糧配給のないことも少なくなかった。命からがらキャンプに到着したあけく、飢えと病と



JAMS で治療を待つ患者と家族

越境爆撃で落命するものが続出した。内戦による死亡者は二〇〇万人以上と見積もられる。そして、この大半が報告書に載らぬ一般の女子供や老人たちであったのは確かである。

民主化・近代化の果て

自活を余儀なくされた人々は、或いはペシャワールで出稼ぎをし、或いは反政府党派の傭兵となり、その日の糧をかるうじて得て生き延びた。国境のキャンプは反政府ゲリラ組織の補給基地と



JAMSの10周年式典で踊る JAMSのスタッフたち

なり、武装した人々が国境を行き交い、政府軍捕虜の処刑が普通に行われた。捕虜たちは羊のように屠殺され、首は路上にさらされた。

ベシャワールの難民団体の美しい議論とは程遠かった。これがソ連と言わず、欧米の救援団体と言わず、「ひとさまを救ってやる」民主化・近代化の結末であった。この事情の中で日本側ベシャワール会の支援が本格化し、現地と共に「おしゃべりより実弾（実のある支援）を」を合言葉に、猛烈な活動が始まったのである。

「パンかご」の奇跡

しかし、必ずしも暗いことばかりだったのではない。「アフガン医療計画」発足の直前、私たちはよくキャンプの難民たちの世話になった。彼らと共に寝起きした日々の記憶は今でも鮮やかである。

身近な飢えも死も、その状況が日常化した者にとつては、普段は何でもない、ささやかな喜びと慰めによって相対化される。冷えたナンの切れはしも、みなで分かって談笑すれば、何にも勝る晩餐となる。誰かが大きな木の株を拾ってきて、数日ぶりに暖炉があたたかくなった時は、皆で歓声をあげた。どんなに欠乏しても、彼らは当然のように食を分かち合い、ユーモアを忘れなかった。子供たちは栄養失調で倒れるまで明るかった。

「生きる厳しさ」は世界中同じでも、追い詰められた場面では、人の生きざまが鮮やかに映る。人間が飢えと死に直面したとき、その品性までが墮落するとは限らない。いや、素朴な生活であればあるだけ、そこに人間の温もりがあった。この楽天性と明るさは一つの特権なのかも知れない。我々もまた、この温もりを支えられて活動を拡大できたのだと、今にして思われる。わずかな食糧で群衆を満たした「パンかごの奇跡」の寓話を、私は初めて理解した。

一遇を照らす

一九九六年九月、首都カブールがタリバン（神学生）の手によって陥落し、再び外国NGOは四

散したが、我々は一步も後退しない。アフガン国内とあわせて、現在二病院と五つの診療所で年間二〇万人の診療を続け、いよいよ意気盛んである。私たちは全世界を救えない。ただ一遇を照らすのみである。

オーバーの要らぬビルの暖房が何やらうす寒く、さらびやかな師走の街路が暗く思われてならなかった。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのベシャワールに赴任。らいの

コントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS（日本・アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。一九九四年十二月にはらい病院PLSを設立。著書に『ベシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ベシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

●ワーカー通信

治療がおもしろく
なってきた

PLS作業療法士 蔵所麻里子

みなさん、お元気ですか。日本はそろそろ忘年会シーズン突入ですね。ペシャワールも随分寒くなり、朝晩ストープは必需品です。毎晩欠かさず朝礼に出てきていたネコも、このところさばりがちで、よく靴のワークショップのストープの前で眠っています。スタッフや患者さんたちが食事を分けてやるので、「あんたは、あつたかい部屋で昼寝して、ごはんも食べれていいねー」と言うのと靴職人の親方がうらやましそうに一言、「仕事もしなくていいしねー」。

結果がはつきり返ってくる

ところで、九月末にペシャワールに戻って来て二カ月経ちましたが、もう二カ月も経つのに……と落ち込む日と、未だ二カ月しか経ってないじゃないかと立ち直る日を繰り返しながら、日々過ごしています。この間の一番の変化は、ハンセン病の治療がおもしろくなってきたことです。日本ではハンセン病の治療に関わったことがなかったので、



PLSで患者さんをケアする蔵所さん。
後は歩行訓練する患者さん

一から勉強しながら、また、言葉も分からないので、患者さんの状態を十分把握できない状況で、どれ程のことができていくか怪しいんですけど、それでもこちらがやったことに対する結果が良くも悪くもはつきり返ってくるので、目が離せません。

どうしたらいいのかな

例えば足底潰瘍ですが、ハンセン病の患者さん

は足の裏に感覚がないことが多いので、傷を作りやすく、傷ができて痛くないので、大きな傷になってから入院することになります。毎日傷を治療して治ると、今度はそこに癒痕ができます。で、教科書をみると、その癒痕を放っておくと、また、そこから傷ができると書いてある。ほんまかいなと思ってみていると、本当にできて戻ってくるのです。そしたらどうしたらいいのかな。毎日足を水につけて固くなった部分を削り柔らかくしないと書いてある。やってみると、本当にきれいに治るのです。じゃあ、今度はどんな靴がいいかな、いつから試そうかなと考える、ほかの患者さんの足も気になってくる。これはどうしたらいいのかな、あれはどうか……エンドレス。と、まあこんな毎日です。でも、足の傷ができた治ったりするのを毎日見ていると、人間の身体って不思議だなあ、生きているんだなあと感じさせられます。

釘一本が大問題

また、何故患者さんは家でも毎日足をきれいに洗わないんだろうとか、何故傷ができたらずぐに病院に来ないんだろうとよく思います。ペラペラ話したらじっくり聞けるのにイライラしながら、スタッフに聞いてもらうと、病院にくるバス代がなかったから家で寝たとか、農業をしているからすぐこんな風に汚くなるんだと言います。靴でもそうです。一年前に病院で作ってもらったという靴を見ると、中に敷いたシートはボロボロ、底を見るとはがれたところをバザールの修理屋さんで直してもらったのか、釘をいっぱい打ちつけて

*

あります。釘は感覚がない足には危ないので、ワークシヨップで作る靴には使わないのですが、長い間はいて底がすり減って縫いつけてあるひもが切れてしまうのです。日本のように悪くなってもないのにすぐ買いかえることを思えば、物を大切にするということはいいことでしょうが、患者さんにとっては傷のために長い間入院を強いられて、家をあげなければいけない、仕事もできない。釘一本が大問題です。患者さん自身それを経験して知っているはずなのに、どうしてすぐ病院に修理しに来ないのか。こんな風に患者さんに関しては、今は分からないことがたくさんありますが、長くここにいて患者さんたちの生活を知ることができれば、少しずつ事情もわかってくるかなと思っています。

あの小さなお金が役に立っているんだ

毎日毎日があつという間に過ぎ去り、平日はあまり日本のことを思い出さなくなってきましたが、時々、靴の材料の買い出しのときや、薬屋さんから薬が届いたのを見たときなど、ふと、ああ、これも日本からの募金で成り立っているんだと思うことがあります。以前は実際日本にいて、募金したり、募金を集めたりして、これが何の役に立つのかなと思うこともありましたが、今は現地にいて、あの小さなお金がこんなに大切な仕事に使われているんだと実感できるのです。これも現地に來て初めて知った感動の一つです。いま、ハンセン病のために離婚されて入院している妊娠四カ月の女の子がいます。彼女がここで治療を受け食事

をし、眠ることができているのは、現地のスタッフの仕事はもちろんです。日本の一人一人の気持ちや働きで成り立っているんだということが、とても不思議な気がしますし、この活動に終わりは無いなとも思います。

日本で忘れていたことが……

今回はよいことばかり書いていますが（もちろん腹の立つこともたくさんありますよ）、ついにもう一つ。最近とてもうれしく思っていることは、患者さんが良くなつてうれしそうに退院していくのを見ると、こちらまで良かったなあと考えることです。そんな風に他人の喜びを自分の喜びとして感じられるということはとても幸せなことだと思います。日本の病院でバタバタ忙しく働いているうちに忘れていたことが、ここで少しずつ見つけたりします。

川を越え山を渡って フィールドワーク(二)

PLS看護婦

藤田千代子

ガラムチェシイマから来た人たち

三日ほど診察をした夕方、雪解け水が増して流れるが激しくなっているヤルクン川のほとりで休憩をしているとき、二人の男性が真剣な表情で中村

先生をたずねてきました。

ラシュツからさらに北部にあるガラムチェシイマというところからきた人達で、昨年調査のため先生たちが行かれたときに接触があったようです。中村先生がラシュツにきているという情報を得てくだったそうです。一人はお年寄りでした。用件は自分たちの村にもとてもひどい病人がいるので、そこでも今回診療してほしいとのこと。お年寄りのほうが病人のことや村のことを説明しながら、だんだん興奮してきて一緒に来たもう一人の人に注意されながらも、ラシュツからガラムチェシイマまでの道はさらに不便だが、自分たちが準備するのでなんとか村まできてほしいと訴えます。二人も、先生もとても真剣です。聞いていて胸がつまりそうでした。そして「診療するとなれば、医者が一人で行っても何もできない。スタッフも薬も必要で、今回は無理だろう」と先生が話されましたが、それでも一日でもきてほしいというのです。最後にはつきりと「行けない」と答えられたとき、先生の顔をじつと正面から見ていた二人の目が同時にうつむいて、しばらくしてから「わかりました」と引き上げていきました。

今回は、まず一か所に腰をすえ、住民との信頼関係を築き、PLSのスタッフのフィールドでのトレーニングをするのが大まかな目的です。でも、昨年の調査のとき、ガラムチェシイマにも行き、現状を見て、知っておられる上で冷静に「行けない」と断らなければならなかった先生の胸中を思ったり、悲しそうに視線を落とした二人を思うとどちらもとても真剣だったので、また、胸がつま



ラシュツを後にマズツジへ向う

ります。とにかくここには医療を必要としている人達がたくさんいるのです。なんとか、ここに私たちのチームが元気に薬品や検査材料を持って、定期的にこれならなあと、ひしひしと感じました。

腹立たしさと現実と

ラシュツでの診療をおえてマズツジへ帰るとき、山の中腹にある、幅五十センチくらいの山道を行きながら馬の上からはるか右下へ見下ろすと流れの激しいヤルクン川があつて見上げるとはるか上に雪が残っている頂があり、ふと、回りを見回

すと対岸にも大きな岩山、後ろも前も同じ風景。四十五度勾配（私にはそう思えた）の上りや下りの道を恐ろしさに汗ビツショリになりながら行くと、診療中に感じたことなど、全て忘れてしまつて、どうして、どうしてラシュツなのかとかどうしてこんな医療も受けられないへんぴなところに住むのかと腹が立つてきました。でも私に、どうして鹿児島に住むのかと問われるようなものだと気がついて「どうして」と問うのではなく、そこに医療を必要としている人達がいるという、そういう現実があるのです。

以前、中村先生が講演で「行きやすいところは誰でも行けるし、行ってくれる。私たちは本当に必要とされているところへ行こう」と話され、本当にそうなんだと感動した覚えがあります。でも、それを実行するとき、ちよつと難しいことになったり、恐ろしかったりすると、すぐ、「どうして? どうして?」と考えたり、住んでいる人に腹を立てたりして、なかなか……

コマンダーは落馬しても……

今回は、初めてのフィールドでの診療で忘れ物もあり、また不足なものも二、三ありました。それと準備から診療中、診療後まで一貫してPLSのスタッフの力不足を感じました。また、女性が男性に混じつてフィールドに出るときの難しさも痛いほど気づかされました（これはまたいつか話したいと思います）。また、スタッフの寝る場所、診療場所など、それから湯を沸かしたり暖をとる薪、全てトレーニング中のスタッフの家のものを

表紙をめぐる小さな物語 13

ウズベキ・ホスロー

甲斐大策

ウズベクのホスローはこの冬、生まれて初めてバルフ近くの村を出た。北方軍に従う小麦粉補給人員としてドシマできた後、「春の花」村で接触中の政府軍とタリバーンの戦況次第の物流を手伝っている村での暮しより収入は大きかった。

この日もホスローは、医療班の忘れ物をヘンジャンへ届けるよう指示され、車の便がなかったので灰色の老馬シャマルをあてがわれた。

純愛詩の主人公と同名ながら風采の上らない独身男ホスローだが、鞍の上では何か違っていた。勇壮な騎馬戦の騎士達を異人種のように眺め、自分が馬に乗るなど考えてもみなかったホスローが、街道脇で見上げている少年達の視線を感じると、胸を張った。黄金色の桑の葉が散り敷く道を往きながら、冬枯れた草原を疾駆する自分を空想していた。

登坂路で喘ぐトラックからメロンの香りが流れ出る。

「ハイコーツ！」

風となった騎士達が馬を駆るかけ声である。ホスローは叫びながら手綱を緩めた。

一瞬、怪訝な様子を見せて三、四歩足踏みした老馬シャマルは、鼻を天に向けてと全速で走り始めた。

この男の体内でトルコ系の血が覚醒したかどうかは判らない。しかし、あのかけ声が老馬に草原での日々を呼び醒まし、トラックの脇を駆け抜けさせたのは確かだった。

使いましたが、物が豊富にある地方ではないので、ずいぶん迷惑をかけたと思います。

最後に帰る途中のことです。大きな岩のゴロゴロある河原で、突然、中村先生の馬がいないて暴れ出し、先生のからだが浮いたかと思った瞬間にまさかさまに宙ぶらりんになってしまいました。皆一瞬緊張してしまいました。運良くけがはなく、本当に皆安心しました。もしあの時に馬が走り出していたらと考えると、今でもゾッとします。でも先生は、片足が鎧に残って逆さになっ

てしまっても、なんと片手は吸いかけのタバコを指にはさんで上にあげておられ、もう片方の手はモーツァルトのピアノソナタを流してあったカセットの入っているジャンパーのポケットを押さえてあったのです。

(終)

▼青年を求む▲

西南大学神学部^の立花一志君は、九月～十一月の三ヶ月を、スタッフ・ハウスの雑務担当ワーカーとして働きました。バザールでの買出しから運転、掃除・料理までこなし、勤務時間以外にも語学や勉強に追われるワーカーを雑務からずいぶん解放してくれました。立花君に続く青年を求めます。但し夏休み期間中は除きます。

ペシャワール滞在記

「癒^{いや}しを求めて」

西南大学学生 立花一志

今回、ペシャワール現地の訪問、滞在がゆるされ、現地の医療現場を直接見る機会をいただいた。大名で水曜日毎の例会に加えさせていただきながら生じてきた個人的な疑問があった。何故それぞれの仕事の後の疲れた体で、何ら見返りのない仕事をするために喜んで集まってくるのかという疑問である。

あるとき、次のように感じた。活動の目的は現地において経済的、社会的、地理的な問題により医療の行き届かない人々へ、癒しの機会を与えることにある。しかし癒しを受けているのは遠く離れたパキスタンとアフガニスタンのある町の一部の人々のみならず、この事務局に集まってくる人々も何らかの癒しを求めてここに来ているのではと感じた。

しかしこの非常に個人的な理由付け、あるいはその活動に対して日本の側で起こっている出来事についての勝手な思いは、中村医師を中心とした日本人スタッフ、現地のスタッフたちの医療活動によって、実はこの私自身が何らかの癒しを受けていると無意識のうちに感じており、またその癒しを望んでいることを意味していた。

これらの思いが私をペシャワール訪問へと導いた。

現地での印象深い出来事があった。ライ患者が足の治療を受ける場面であった。金属製の医療器具が変形した足の底を挟み、膿が流れ出るその時も、患者は痛みを覚えなかった。「痛みを覚えるべきこと」に無感覚になり、傷を作り、化膿し、抜け落ち、与えられたままの自分とは程遠い姿となってしまったのは彼らだけであるのか。その病原菌はこっそりと私の心の中にも潜伏し巣食っているのではと思い恐れを覚えた。

水曜日の通院はこれからも続きそうである。

●事務局だより

*現地の動きが流動的です。JAMSが移転を余儀なくされました。十月末に、突然家主から土地を他者に売却した旨の通知があり、十二月末までに移転するようにとの通告でした。詳細は省きますが、幸いPLSの近くに空きの医院があったので移転中です。JAMSは創立十周年を十月七日に行なったばかりでした。式典の前夜は激しい雷雨とチャボの卵ほどの雹に見舞われましたが、悪天候をものともせぬスタッフの機動力で、当日は花柄を内にあしらった巨大なテントの下で終日宴が続きました。中村先生のベルシャ語での挨拶、シャワリ先生のJAMSの来歴についての噛んで含めるような講義で始まりましたが、わずか七人でスタートし激動の十年を乗り切ってきた二人の胸には、熱いものが去来するように見えました。おりからタリバン（原理主義グループバシクトウン族）がカブールを占拠し、マスード將軍（タジク族）のラバニ政権と軍事対立しており、JAMSのスタッフ（バシクトウン・タジク）の内部にも微妙な空気が流れておりましたが、この日は皆、伝統音楽の楽士の音に合わせて、民族

の垣塙^{かき}となつて踊りの輪を描いておりました。ベシヤワール会からは事務局の福元が、次のようなメッセージを伝えました。

「JAMSの歴史はアフガニスタンの悲劇と希望の歴史そのものです。私たちがあなた方を支援するのは、経済的に豊かだからということではありません。あなた方がお金や政治権力のためでなく、平和と真実に向かつて営々と努力し忍耐を続けるその姿勢に共感したからです。支援しているのは日本のごく普通の市民なのです。日本とアフガニスタンは遠く離れていますが、私たちの心は常にあなた方とともにあります。」

*十月九日には新病院建設のセレモニーがありました。PLSのスタッフ全員が敷地に集まり、お祈りの後お菓子一個とリンゴ一つづつを食べ、終わりました。来年の一月にはいよいよ着工です。

●ベシヤワール会ハンセン病院建設基金
郵便振替 〇一七三〇一九一三二四二一

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに—

中村哲 四六判上製三三六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四) 四八三八

ベシヤワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円
石風社 福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四) 四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一一〇〇円
筑摩書房 東京都台東区蔵前二一六四
電話 〇三(五六八七) 二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇
二五上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二
三七二) 内におく。